「平和を望むなら、闘いに備えよ」

JJ1SXA/池

… 「平和を望むなら、闘いに備えよ」、この言葉は、古代ローマ帝国の軍学者ウェゲディウスが発したものであると教えられた…と、西村真悟氏が、「真悟の時事通信」で書いていた、今、日本人の大多数の願望は、「平和を望む」だが、そのためにはどうするのだという議論が欠落している。

平和のためには、改憲許すまじ、9条死守だと叫ぶ人も多い、戦後60数年、日本を取り巻く安全保障環境は、それを許してきた、だが、現在の安全保障環境は、激変し、そんな平和ボケを言い続けている状況では無い、今、南シナ海で、ベトナムに対する中国のとんでもない行動を、他国のことだと簡単に考える人が多い、しかし、東シナ海の尖閣諸島でも同様な事件が起きるであろうことを承知しているのか。

強権国家が国際秩序の変更に動く時、他地域で起きた戦争を巧妙に利用する、朝鮮戦争が勃発し世界の目が朝鮮半島に集中していた1950年、中国軍は近代的な国家体制を整えていなかったチベットに侵攻した、ソ連は 1956 年、スエズ動乱（第2次中東戦争）の混乱時に、ハンガリーに軍を増派して自由化運動を抑え込んだ。

今、ウクライナ問題に世界の耳目が集まる中、中国はベトナムと事を起こしている、少しメドがつけば、次は尖閣だ。

日中友好のためと称して議員団が訪中した、尖閣を奪うまでは、決して友好などあり得ない、無駄なことだ、中国は、国際ルールを全く無視し、東シナ海に、とんでも無い防空識別圏を設定、南シナ海では、九段線などとわけのわからぬ領域を決め、全てが中国の領域だと主張する暴力国家だ、紳士的な話に乗るはずが無い、国会議員のゴールデウイークの慰安旅行でしかない、成果など期待しようが無い、それどころか、日中関係が険悪なのは全て日本側にあると言われて、黙って帰ってきた、「それは違う、日本にも一部責任があるかも知れないが、中国の方がもっと悪い、少しは反省して態度を改めろ」ぐらいの啖呵が切れないものか、情けない。

4月に来日したオバマ米大統領は、「尖閣諸島は日本の施政下にあり、それ故に、日米安保条約第5条の適用範囲内にある」と表明した、米大統領が公式に尖閣諸島への日米安保適用を宣言してくれた、と日本では発言を歓迎する空気が広がった、だが、日本の施政下で無くなれば適用範囲外ということだ、通常の武力攻撃では無く、漁民を偽装した中国兵を尖閣に上陸させる、いわゆる「グレーゾーン」シナリオの場合、「中国国民の保護」の名目で中国海警局の公船から行政官も上陸して「島の施政権は中国側にある」と主張し始めた場合、米国は本当に戦ってくれるのか？

日本自身で守らないでどうするのだ、尖閣を獲られれば、次は沖縄、次は…と続く亡国の危機、この期に及んでも、ボケてる輩が多すぎる、議員にも多い、寝言を言ってないで、平和ボケから目を覚まし「闘いに備えよ！」　　（11.May,2014 記）